

令和３年度 第３回インクルーシブ教育（支援児包括教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和４年３月１８日（金）１４時～１６時

□開催場所：駅北庁舎４階 会議室

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 土本雄司
水野浩庫 保義博 岡英樹 高木千穂子 成瀬輝正
長谷川邦代 景山祐子 石黒祐子 吉田香奈子
- ・事務局：高橋副教育長 林教育次長 久野教育研究所長 吉川課長補佐
尾辻春香 石田光恵 小島章予 長谷川京子 後藤正樹

１ あいさつ

副教育長あいさつ

２ 報告・検討内容

（１）報告事項について

事務局

令和３年度の基本施策１から６の進捗状況について説明

委員

I C Tを使うことで、一人一人に合わせて学習ができたり、友達と交流ができたりすることで、限られた時間の中で学習を進めることができるのは、いいことだと思いました。年長児が卒園をすると、小学校に入学をします。この子たちが、I C Tを使って学習をすることは画期的だと感じました。

医療的ケアについては、以前から保護者から要望があったのですが、保育士では対応することが難しく、なかなか入園までには至りませんでした。来年度から体制が整って、入園が叶うことになったので、保育の現場も受け入れる準備をさらに進めていきたいと思います。

委員

発達支援センターでは、保護者への情報提供として、教育相談室の担当に講師を依頼して、先月と今月と発達支援センターに通うお子さんの実態に合わせた話をさせていただきました。保護者も就学に向けて見通しをもって、準備をすることができるのではないかと思います。

委員

居住地校交流についてですが、これまでは、特別支援学校の子と、一緒にゲームを行ったり、学校ごとで頑張ってきたことを発表をしたりと、楽しい時間を過ごしていましたが、ここ数年は、コロナ禍でこれまでのような活動をするのができなくなってしまいましたが、直接交流はできなくても、オンラインでの交流ができたことはよかったと思

います。オンラインでは、中学校のイメージが湧くところまでは難しいかと思いますが、知っている子の顔を見ることで、頑張っているなあと感じることができたのか、家に帰ってもたくさん話をしてくれました。

委員

医療的ケア児の受け入れは、本当に嬉しいことでした。何年も前は、障がいの重い子が保育園や幼稚園に通うことが一般的ではありませんでしたが、保育園では、とても手厚く見ていただいて、友達とも交流できたことが、本人も嬉しかったと思います。また、周囲の子にとっても、いろんな友達がいることを知るいい機会になったと思います。医療的ケアの必要なお子さんの保護者も、みんなと一緒に過ごしたいという思いがあると思います。多治見市に生まれた子どもたちが一緒に学んだり、交流したりすることが、当たり前になったらいいなと思います。

委員

平和中学校と「(事業所の) けやき」では交流を行っており、以前は地域清掃を一緒に行っていました。ここ数年は、コロナ禍で、なかなか実施することができませんが、こういった交流を行っているということを皆さんにも知っていただきたいです。

個別の教育支援計画については、事業所においても支援計画は大切で、現状と将来の目標を保護者と相談をしながら作成をしていきます。作成を通して、一人一人の課題を整理し、将来の目標等を保護者と共有できるといいと思います。

委員

小学校3年生頃から学校に行こうとすると頭が痛くなったり、下痢になってしまったりして、時々学校を休む子がいました。受診をしたときは5年生で不登校でした。調べてみると、読み書き障害であることが分かりました。診断書を出し、特性に応じた合理的配慮をしていただくように担任の先生にお願いをしました。担任の先生は、「こういうことで辛い思いをしていたんだね。気がつかなくて申し訳なかった」と、本人と保護者に謝罪をされました。本人は、先生が分かってくれたというだけで、気分が晴れたそうです。担任の先生も、すぐに校長先生と相談され、対応を考えられ、その後は学校を休むことがなくなりました。こういった事例は最近もあります。多治見市の先生方は学習障がいについて勉強をされ、真面目に取り組んでいただける方が増えてきたことを、大変嬉しく思います。しかし、子どもによっては、特別な配慮を受けることに抵抗のある子もいます。配慮を受けることで、自分も楽になることは分かるけれども、みんなと一緒にでないことをやることは嫌だ、と言う子もいます。今後はデイジー教科書を使ったり、支援を受けたりすることへの偏見をなくし、発達障がいのある子にとっては、大切な学習手段であることを、みんなが理解できるような雰囲気をもたせたいと願っています。

副委員長

報告を聞いていると、多治見市のインクルーシブ教育が確実に進んでいるなと感じて

います。それぞれの子どもに合った学習方法、今日的にはＩＣＴを活用を取り入れ、「学習していくことが楽しい」「できた」といった達成感を感じることに繋がると思います。真のインクルーシブ教育という観点から考えると、診断書がある子だけが特別な学習支援を受けられるというのではなく、誰でも支援を受けることができることが大切だと思います。例えば、「デジタル教科書には、こういう機能がありますよ」と説明をし、どの学び方がいいのかを、子どもが選択する機会を増やすことで、多くの子どもたちの困り感が減り、自律的に学習をしていくことができる子どもが増えることにもつながっていきます。

保護者への情報提供については、他市ではできていないことなのですが、多治見市では精力的にされていると感じました。保護者や本人が情報を得る機会を提供していくことで不安も解消されると思います。

兵庫教育大学 宇野宏幸先生（副委員長）による講話（概略）

「ＩＣＴ活用の考え方と実際」

文部科学省は、新しくなった学習指導要領を実現をしていく手段として、令和の日本型学校教育を提唱しました。「全ての子供たちの可能性を引き出す。個別最適な学びと、協働的な学びの実現」というサブタイトルがついていますが、特別支援教育で話題にしてきたこととつながるような内容になっています。これは、インクルーシブの趨勢が学校教育でも始まることを意味しています。教育的ニーズのある・なしにかかわらず、全ての子どもたちのニーズを踏まえて、可能性を引き出すような教育をしようということが特別支援教育と言えます。キーワードとしては、「個別最適な学び」「協働的な学び」の２つになります。

「個別最適な学び」というのは、多様な学び方があるという前提で、先生が一方的に知識を教えるのではなく、学習者が中心になることで自律的な学びになるということです。どういう目的で学んでいるのかが自分で分かり、学びのゴールに向かって、自分で計画を立て、自分で評価をすることを目指しています。また、ＩＣＴを活用することで、個別の学習状況が集約できるようになります。一律だった学習内容も個に合った内容に変えてはどうですか、と文部科学省は話しています。多治見市では、このあたりを先んじてやってみてはどうでしょうか。

みんなでどう学ぶかといった「協働的な学び」も話題になっています。「主体的で対話的で、深い学び」と学習指導要領でも言われています。特別支援教育では、「協同学習」と言われており、障害のある・なしに関わらず一緒に学ぶことを大切にしてきました。それぞれの子どもの持ち味や強みを活かすことができるような学び方を推進しています。そのため、特別支援教育で大切にしてきた「協同学習」は、「協働的な学び」と親和性があります。

探求学習は、ＳＴＥＡＭ教育（科学、技術、工学、芸術、数学）とつながっています。アメリカでは、多様な学校が作られており、ＳＴＥＡＭ教育に力を入れている学校があります。このＳＴＥＡＭ教育もＩＣＴと親和性が高いです。プロジェクト型学習は、チームで計画をし、実行をしていきます。その中でメンバーの役割が生まれていきます。

ＩＣＴが話題になっていますが、ＩＣＴを使うことが、目的ではなく、道具であり、

手立てを考えていくことが大切です。活用方法も多様になっており、プログラミング学習やクラウド型学習支援、リモート授業と言った例としてあげられます。プログラミング教育は、いかに論理的な思考をするかということを学びます。この学習は、結果が目に見え、すぐに分かるので発達障がいの子どもに向いています。民間では、プログラム教育を療育に取り入れているところもあります。クラウド型の学習支援は、いつでも、どこでも学ぶことができるメリットがあります。また、子どもの実態に応じて目標設定をし、スモールステップで学習することもできます。タブレット端末の動画機能を使うことも有効です。多治見市内の南姫小学校では、消防署や美術館をオンラインでつないで、まるで訪問をしているな体験をすることができました。また、日常生活においても、これまでは、先生の説明を聞き、板書を写していたのを、先生が説明をしている場面を、子どもが動画で撮ったり、宿題の連絡もデジカメで撮影したりすることで、あとでゆっくり確認をすることができます。こうすることで、集中して話が聞けない子や黒板を写すことが苦手な子も、学習への負担が少なくなります。不登校の子も、自宅と教室をオンラインでつなぎ、自宅で学ぶことができたり、発言が苦手な子がチャット機能を使って、自分の考えを伝えることができたりしたという実践例があります。

先生方の中には、「それでいいのかな」と思う方もいるかもしれませんが、子どものために柔軟な発想で、試みてもらうことを期待しています。

委員

デジタル教科書を、LDや外国籍だからという理由ではなく、誰でも使えるようにすることで、子ども自身が学習方法を選択することが広がってくると、周囲の子も理解も深まっていくと思います。

委員

幼稚園や保育園に通っている子どもたちも、情報機器の扱いに慣れており、画面上から容易に情報を得ることができます。幼稚園や保育園では、五感を使って学んでいくことが多いのですが、子どもたちの振り返りに使ったり、場面を思い返すことが難しい子が、場面を思い出したりする場面で使用できるのではないかと思います。

委員

コロナ禍でリモートで授業を受けている生徒もおり、教室での授業をそのまま視聴するようにしています。実際に見ている子どもたちからは、黒板の文字が見づらいといった話も聞きます。教師からは、オンラインで十分力を付けることができるのか、不登校の子がリモートで受けた場合の評価の仕方はどうするのか、家で学ぶことができるのであれば、学校へ来て勉強をする子がいなくなってしまうのではないかとということも話題になりました。昭和型の教育では「学校で勉強をする」という意識が強いのですが、いじめを受けて学校で学ぶことができないといった生徒には、個別の教育支援計画を立てながら、家で学ぶことができるような環境作りをしていくことも大切ではないかと思います。

副委員長

大学では、大学に来る子もいますが、リモートにも対応するようになっていっています。大学院生の中に遠くから来ている人の中には、「リモートで受けます」「リモートにしてください」という人もいます。リモートの強みと対面の強みがあるので、その強みをどう考えるかということが大切だと思います。また、ICTの活用として今後考えられるのは、事前学習として、リモートで事前に予習として課題を提示して、対面で授業を受けるといった活用法もあります。

委員

ICTを使ってよかったなと思ったことは、場面緘黙の子どもに対してです。一斉指導の中では音読が難しかったのですが、家で音読の場面を録画してみてもうどうだろうと提案をすると、家庭の協力もあり音読をする様子を動画で録画をすることができました。また、コロナ禍で幼稚園や保育園の年長児の学校見学ができなかったため、画像を使って学校紹介をしました。一方で、画像だけでは分からないこともあり、重さの学習では、実際に持って重さを感じることも大切だと思います。

今後やってみたいと思うことは、通級で行っているソーシャルスキルをリモートでできないかと考えているのです。いろんな人に相談をしてみると、目の前で褒められる経験が大切だということを教えてもらい、直接体験の重要性を感じました。

委員

多治見市に本年度転勤をしてきて感じるのは、「連携」「つながり」を大切にしているということです。ICTの関係では不登校で学校に来ることができない子や相談室で学んでいる子もみんなと一緒に学ぶ「つながり」ができました。小学生ではリモートも2時間くらいが限界かなとも感じます。その場合は、ロイロノートというアプリを使って学習プリントを送って、学習を進めるように促しました。

また、教育委員会や子ども支援課を中心に、幼稚園や保育園、小学校、中学校が繋がっており、一人一人を、多くの機関で一人一人の子どもを見守っていることを感じました。幼稚園や保育園からの情報はもらいますが、成長した姿を幼稚園や保育園に返していないということを感じているので、来年度は、この点を意識していきたいと思っています。

3 あいさつ

教育次長あいさつ